

狛江の地蔵信仰 I

平成14年3月29日発行

狛江市和泉本町1-1-5

電話 (3430) 1111

狛江にある6カ寺の境内や墓地、あるいは辻などには、古い石造の地蔵にまじって、近年造立された地蔵像も少なからずみられます。なかでも、昭和・平成にかけて造られた水子地蔵が目をはきまします（円住院・慶岸寺・千手院）。また、まわり地蔵で知られる延命子安地蔵尊を本堂にまつる泉龍寺境内には、この地蔵像を何倍かに模したという大きな坐像の石仏が、造られています（昭和57年）。昭和40年代から平成の初めに、六地蔵を造立したところもあります（明静院・円住院・千手院）。一方、辻など路傍にまつる地蔵尊のなかには、道路拡幅整備によって遷座したものもみられますが、工事の際に破損したり、心ない者に持ち去られたりした像もあったそうです。

ここでは、江戸時代に造立され、狛江の人々の暮らしの中に、その信仰が息づいてきた、いくつかの地蔵尊とその習俗をとりあげてみました。なお、江戸時代から近郷近在に知られた、泉龍寺のまわり地蔵（延命子安地蔵）については、すでに文化財ノート4でとりあげていますので、除いてあります。

I 泉龍寺の耳切り地蔵—狛江最古の地蔵像

元和泉の泉龍寺別院（平成6年建立）の入口近くに、石造丸彫り立像の地蔵尊が安置されています。耳の損傷から、耳切り地蔵とか耳なし地蔵などとよばれてきた地蔵像で、右手に錫杖、左手に宝珠を持ち、像高は113cmほど。現存する狛江の地蔵像の中では最も古く、背面の銘文から、明暦3年（1657）10月8日、檀那の菩提のために、龍法寺の西源（二世住僧）が造立したものと知られます。龍法寺（龍宝寺、隆法寺とも）は、江戸時代に、いまの別院のあたりにあった小寺で、泉龍寺の末寺。

地蔵尊は、別院建立の以前には泉龍寺の境内、山門を入れて鐘樓の左手わきにまつられていましたが、元は龍法寺近くの辻に立っていて、辻斬りに襲われた人の身代わりになり、耳に刀傷を受けたといわれています。辻のあたりで追いはぎにあって逃げる拍子に片耳を斬られた人がいて、斬られたと思ったのに自分の耳は無事で、傍らの地蔵の耳に刀傷があったということです。このような身代わり伝説から、危難を救ってくれるお地蔵さんとして信心され、また、耳を斬られたことから、とくに耳の病に御利益があるともいわれていました。耳病治癒の願かけには、ひと節の竹筒に入れた酒と穴あき石などを供えたものです。

この地蔵伝説には異説もあって、遊び場所でけんかをして耳を斬られた酒飲みの道楽者のために、造られたといえます。また、龍法寺が廃寺になったため泉龍寺に移したところ、妖怪変化があらわれて廃寺の前を通る人をおびやかしたので、ある人がその妖怪に斬りつけて何故このようなことをするのかと問うと、元のところ（龍法寺のあったところ）に戻りたいと言ったということです。

〔付〕念仏供養を目的として造立された地蔵尊も多くみられ、念仏講中などによる市内最古の地蔵尊は、岩戸南の明静院にある貞享4年（1687）の舟型光背の浮彫り立像で、「念仏供養同行九人」による造立（現在、山門前向かって右手に安置）。泉龍寺境内に見られる元禄元年（1688）の浮彫り立像の地蔵尊は、「泉村同行三十四人」による「念仏講供養」のための造立となっています。

II 慶岸寺の塩地蔵—路傍から寺へ

岩戸北の慶岸寺の境内、本堂の南に、塩地蔵、塩なめ地蔵などとよばれる地蔵尊がまつられています。「地蔵さまの小屋」といっている覆屋の中に、セメントで補修した丸彫り立像を中央に据え、台座を残してほとんど全容の失われた1基と、とろけたような形の丈の低い1基

が、安置されています。現在、塩地蔵のご本体とされているのは、中央の像で、これらの像は、かつては世田谷通りの二の橋近く、稲毛屋（魚屋）さんの旧店舗の西のあたりにあった辻の地蔵でしたが、昭和10年代の初めに道路の拡幅によって慶岸寺境内に移されました。住職と近くに住む檀家の人が、リヤカーにのせて運んだそうです。その折に、損傷した像の補修も行われたということです。

この地蔵尊は元は、岩戸村の名主でもあった須田家とかかわりのある地蔵という言い伝えもありますが、村持ちの地蔵か、ともいわれています。「北の寺」とよばれていた慶岸寺への遷座にあたっては、「南の寺」の明静院住職をはじめ岩戸の有志の人たちが協賛者として名を連ねていました。現在の覆屋は昭和40年、檀家の一人の寄進による改築で、「塩地蔵菩薩」と墨書した木札が掛かっています。

塩地蔵は、安産や子育てに御利益があるといわれ、また、いぼを治す地蔵として、遠方からの参詣もみられました。願をかけるとお礼に塩をあげるので、塩地蔵、塩なめ地蔵などによばれてきました。「元はお地蔵さんのかっこうがあったのに、あんまりお塩をあげたので、からだが崩れてしまった」ということです。歯痛のときにも願うこともありました。供えてある塩をいただいてきて、そのひとつまみを入れた風呂にはいると風邪をひかないともいわれていました。磨滅がいちじるしく、造立年代なども不詳ですが幾度か造りかえられ、江戸時代から信仰をあつめてきた地蔵尊と思われます。

三吉朋十著『武蔵野の地蔵尊 都内編』（昭和47年刊）には、慶岸寺の塩地蔵の項もあって、いぼ地蔵としてとりあげられています。

〔付〕慶岸寺の境内、本堂の東に、かつては地蔵堂がありました。明治20年代生まれの人が子どものころに、境内で遊んだときには、お堂があったそうです。『新編武蔵風土記稿』（文政11年<1828>完成）にも、その地蔵堂について、「客殿の東にあり、二間に一尺、西向、本尊地蔵は木の坐像一尺八寸厨子入りにて彩色を施せり」と記されています。この地蔵像は延命地蔵とされ、左手に小児を抱いているところから、現在は慶岸寺幼稚園に安置されています。

なお、江戸時代後期作と思われる地蔵立像が本堂にまつられています。

Ⅲ 六地蔵

寺の境内や墓地の入口などに見られる六地蔵尊は、六道を輪廻転生する衆生を地蔵が救済するということから、六体の分身をかたどって六地蔵として信仰するもので、その持物、印相（手指の構え）による像形の違いも、それぞれにみとめられます。市内に現存する最古の六地蔵は、東和泉の玉泉寺にある元禄16年（1703）のもので（山門に入って左手裏、丸彫り立像の背面に銘文のある像は5体、ともに頭部を欠く）、「猪方村女中念仏講」29人による造立と知られます。一方、当寺の墓地入口近くには、「経王供養塔」の台石に立つ地蔵尊を中央に据えた、やや新しい時代のもと思われる六地蔵が並んでいて、寺参りや墓参の途次などにお参りされています。

泉龍寺境内の中ほどに並んで、参詣の人々の目をひく六地蔵（回国供養のために造立された像容の大きい地蔵を中心に、左右に3体ずつ安置）は、宝暦6年（1756）の造立。丸彫り立像の像高は1m近くあり、市内の六地蔵の中では最も大きな地蔵像となっています。赤ん坊が弱かったりすると、この六地蔵さんにお参りして、丈夫に育つようにと心願をかけ、お礼に頭巾とか、よだれかけなどをあげたということです。

子育てに限らず、さまざまなことを、六地蔵さんにはお願いしたものでした。このほか造立年代が江戸時代のものと知られる六地蔵は、慶岸寺に見られる、岩戸村の女中念仏講による安永10年（1781）造立の丸彫り立像の6体。東野川の千手院には、寛政13年（1801）造立の六地蔵がありましたが、損傷がひどくなったため、平成2年、天皇即位を記念して檀徒有志などにより、新たに六地蔵を造立しました。（狛江市文化財専門委員 中島恵子）

狛江の地蔵信仰Ⅱ

平成14年3月29日発行

狛江市和泉本町1-1-5

電話 (3430) 1111

Ⅳ 辻の地蔵

① 駒井の北向き地蔵

かつて登戸道の名のあった駒井大通りの四つ辻の一角（駒井町三丁目）には、小さなお堂のなかに坐像の地蔵尊がまつられています。通りに北面して安置される地蔵は、北向き地蔵とよばれ、とくに子どもの夜泣きに御利益があるというので、夜泣き地蔵ともいわれていました。

古い台石の上に据えられて、口元に紅をさし額に紅で白毫をつけた石造丸彫りの地蔵は、昭和50年ごろの造像で、堂前右手に東向きに置かれた古像が、江戸時代の造立によるものです。車の事故で堂や地蔵像が損傷したため、登戸の石材店に頼んで新像が造られました。

ここに地蔵尊が初めて造立されたのは、台石右側面の紀年銘によれば寛政5年（1793）10月で、左側面に刻まれた願主は、武州多摩郡駒井村の秋元磯右エ門、高橋三右エ門、それに念仏御詠歌講中。そして台石正面には、「天下泰平国土安穩 奉造立地蔵大菩薩 五穀成就萬民快樂」と、3行の銘文が刻まれています。高橋三右エ門の流れをくむ、高橋家当主の賢二さんによると、三右エ門は5代前の人で、「お地蔵さんは、うちの先祖のおじいさんと、秋元総本家の磯右エ門というおじいさんが、西国三十三番札所へ行った記念にこしらえた」と、父親の三五郎さん（明治36年生）から聞いたということです。このような言い伝えから、秋元・高橋両名の札所参詣という回国記念供養に、駒井の念仏御詠歌講中の人たちが協力して、地蔵尊を造立したことが知られます。

新旧2体の地蔵像には花などが供えられ、堂内には盆の施餓鬼会の「北向地蔵尊」供養の塔婆が納められています。施主は、この地蔵堂の地所に隣接する「地蔵園」とよばれる植木屋さんで、やはり高橋氏。前にあげた高橋賢二家とともに、この地蔵尊の主守り（管理）をしてきました。

北向きにまつる地蔵は、めずらしいので、霊験あらたかな地蔵さんだといわれ、子どもやお産のことをお願いするとよく聞いてくださり、とくに夜泣きにはよいとされて、遠くからもお参りにくる人がありました。戦後、昭和23年、長女を出産して夜泣きに悩まされたとき、姑に言われて一週間、毎日毎日、北向き地蔵さんにお参りし、お礼には絵馬をあげたという人もいます。交通事故で堂や地蔵像が損傷したとき、車を運転していた人には、けがもなかったので、お地蔵さんのおかげだということにもなったそうです。いまでは、何事によらず無事息災を願って、参る人が多いといえます。

② 猪方一丁目の辻の地蔵

猪方の石井貞男さん宅のブロック塀の一角に、道路に面してまつられる地蔵像があります。像高は50cm足らず、右手に錫杖、左手に宝珠という、浮彫り立像で、わずかに光背が遺されています。江戸時代の造像と思われますが、年代は不詳。

丁字路の辻にあたるこの場所のあたりは、道路拡幅前には道のふちに茶の木が植えられ、茶の木の茂みを背にして地蔵尊が立っていました。辻の地蔵さんは道しるべにもなっていたといえます。若い衆が、力石を担ぐように、辻の地蔵さまを担いでみることもあったそうです。

平成3年の道路拡幅工事で元の居場所がなくなった地蔵像は、近所の人たちなどの頼みもあって、しばらくの間、石井家の庭に置かれていましたが、塀を造るにあたって、その一角に

設けた壇に安置されることになったのです。遷座の際には、近所の数人もあつまって、前々から地蔵像の安置の場所など地蔵像の扱いなどについて助言を受けていた、石井家の檀那寺である泉龍寺の住職に、供養をしてもらいました。

ブロック4個を外して造った壇は、前面を黄褐色のタイルで細くふちどりをし、地蔵像はその奥に据えられて、花なども供えてあります。路傍の地蔵尊が、道路事情などによって失われてゆくなかで、この辻の地蔵さんは、安住の場を得たようです。近辺の10軒ほどの家の人たちは、今も昔からの習わしどおり、盆の迎え火と送り火を辻の地蔵さんのところで焚いています。

この地蔵尊も、北向き地蔵ということで、お参りにゆく人があるそうです。

③ 西野川の辻の地蔵

西野川二丁目の丁字路の一角に、広がる畑を背にして、大小2体の地蔵尊が立っています。江戸時代からのものと思われますが、土台の石に刻まれた紀年銘から造立年代の明らかなのは、像高(45cm)の低い地蔵のほうで、寛延4年(1751)、念仏供養のために造立されたもの。丸彫り立像の2体の地蔵尊は、狛江市内では、ひときわ目に立つ辻の地蔵さんです。

右手に錫杖、左手に宝珠をもつ2体の地蔵像の足もと近くには、数年ほど前から、水子供養にみられる小地蔵や豆地蔵などが何体も置かれるようになりました。これは、水子供養を祈願する人たちがあげたものと思われます。ここのお地蔵さんを水子地蔵とでも思ったものか、とくに2、3年前には、豆地蔵などがたいへんな数になったことがあったと聞きました。

地蔵尊をまつこの場所は、富永家の持ち地の一画で、山角型の馬頭観音や庚申塔も並んでいます(2基ともに大正10年の建立で、願主は富永広吉)。

[付] 辻や道端に遺されている石造物には、地蔵像と庚申塔も多く、いまでもその両者が見られるところは、市内に数カ所あります。そのなかの一つ、和泉本町の松原庚申堂の前に立つ地蔵尊も、年代は不詳ですが、念仏講供養のために造立されたものです。

V 百地蔵まいり

幼い子どもを亡くしたときには、百地蔵まいりといって、百体の地蔵にお参りして供養することも行われていました。狛江でも、戦前、昭和の初めころまでは、みることのできる信仰習俗だったようです。小足立(西野川)の富永佳一さん(明治26年生)から、百地蔵まいりについて、次のように聞きました。

小さい紙に「南無地蔵尊」と書いたものを百枚こしらえ、地蔵さまにお参りして1枚ずつ貼って歩く。それを百地蔵とか百地蔵まいりなどといっていた。子どもが死んだとき、いつだっていいから、方々のお墓の地蔵に貼って歩く。子どもの供養と思ってやったんだね。そうすることが、子どもの供養になる。子どもがひとつかふたつで死んだときなんか、やってたんだね。

子どもを亡くしたので、百地蔵まいりに行ったのは、関東大震災より前、大正10年ころだったという人もあります(猪方 明治30年生 女性)。今とは違って、乳幼児の死亡率も高かったので、幼い子どもを亡くした人もまれではなかったのです。お地蔵さんに百地蔵まいりの紙札が貼ってあるのを、時には見かけることもあったそうです。墓地には、丸彫り立像の地蔵像のほかに、地蔵を浮彫りにした墓碑も少なからず見られます。百地蔵まいりには、狛江以外の地域にも出かけたものでした。紙札は貼らず、できるだけ数多くのお地蔵さんにお参りすることもあったようです。

(狛江市文化財専門委員 中島恵子)